《実施結果報告書》



広島平和記念式典派遣事業

平成28年8月5日(金)~7日(日)



1

美しい自然を愛し平和を願う心は人類共通のものです。

これを根底から揺るがし、地球環境と人類の平和を脅かす核兵器は絶対に容認できません。

世界でただ一つ悲惨な体験をした被爆国の国民として、核兵器の廃絶と非核三原則をいま一度世界に向け強く訴えていかなければなりません。

人と自然と産業が調和しながら進化するまちづくりをめざしている 燕市は、新市誕生を機として、決意を新たに世界の恒久平和を願い、こ こに「非核平和都市」を宣言します。

燕市

目 次

Ι	広島平和	記念式典派遣	事業実施	もにあた	こって (• • •	• •	•	• •	•	1 %- 1 ÿ-
Ι	ごあいる	さつ・・・・・	• • •	• • •	• • •	• • •	• •	•	• •	•	2° [−]
${ m I\hspace{1em}I}$	広島平和	四記念式典派遣	事業日科	呈•••	• • • •	• • •	• •	•	• •	•	3 ^{%−}
IV	研修して	π··································	• • • •	• • • •	• • • •		• •	•	• •	•	4 %−
	1	出発式参加者法	快意表明	月							
	2	参加者レポート	~								
		燕中学校	小黒	有希							
		小池中学校	近藤	翼							
		燕北中学校	安井	陸渡							
		吉田中学校	鈴木	志歩							
		分水中学校	千嵐	さくら	ò						
	3	平和への誓い									
	4	引率者レポート	-								
		学校教育課	指導主	È事	小泉	浩彰	;				
		学校教育課	指導係	系主任	諸橋	圭子	-				
	5	平和記念式典》	派遣事 第	美の様子	7						

V 派遣事業の概要・・・・・・・・・・・・・27 💝

広島平和記念式典派遣事業実施にあたって

燕市長 鈴木 力

広島・長崎の被爆の悲劇から、今年で71年が経ち戦争を知らない世代も増え、悲惨な記憶も風化させることのないよう世界でただ一つの被爆国の国民として、今日、我々が享受することのできる平和と繁栄が、戦争による尊い犠牲の上に築かれているということを、後世に永遠に語り継いでいくことが大切であると実感しております。

そして、世界に目を向けてみますと、地域紛争や戦争、あるいはテロ 行為によって、今なお多くの人々の尊い命が失われています。

燕市は、平成18年12月25日に「非核平和都市」を宣言しました。この宣言は、核兵器のない真の世界恒久平和が実現することを願って行ったものです。

今年は、現役アメリカ大統領が広島の地を訪れた歴史的な年でありました。このような年に、市内の5つの中学校から広島へ行った生徒5名は、千羽鶴の奉納をし、広島平和記念資料館、原爆ドーム、爆心地などの見学、被爆体験講話の受講、灯ろう流しなどの体験をとおして、過去を学び、現在を知り、未来を考えるきっかけになったことでしょう。

生徒たちは直接、目と耳で学び、肌で感じてきたことを市民の方々へ報告会で発表しました。また、それぞれの中学校で全校生徒へ向けて、平和な社会であるために、自分たちが何をすればよいのかを伝えたのではないかと思います。

これからも、体験し感じたことを学校、家庭、地域で語り、平和の大切さ、命の尊さについて考える機会を広げ、戦争や被爆又は身近な問題について、自らできること考え、行動してほしいと思います。今後の派遣生の活躍に期待しています。

終わりに、今回の事業実施にあたり多くの方々からご協力いただいたことにつきまして、心からお礼を申し上げます。

ごあいさつ

燕市教育委員会教育長 仲野 孝

燕市では非核平和の推進と平和学習活動の一環として、平成 20 年度 から毎年、市内の5つの中学校から生徒を広島へ派遣しております。

生徒たちは広島平和記念式典へ出席するとともに、各学校の生徒が平和の祈りを込めて、また戦争の犠牲となられた方々の冥福をお祈りして折った千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げてきました。

広島の原爆投下については教科書に、ほんの数行しか書かれていません。また、燕市と広島市では、戦争や原爆投下について語り継ぐことに使われる時間は、大きく違っていると思います。

広島平和記念式典会場の空気は、その日その場所を訪れないと感じることのできないもの、教科書や新聞などの文字や写真だけでは伝わらないたくさんのことを教えてくれます。

今回、燕市内各中学校の代表として広島へ派遣された5人は、五感を働かせ、その場所へ行ったからこそ分かること、感じられることを吸収してきてくれました。

さまざまな体験をとおして、戦争や平和について感じ、これから自分 たちにできることから行動し、未来をつくろうという派遣生の姿勢がこ の報告書を読んでいただければ分かるかと思います。

世界で唯一の被爆国である日本が戦争と平和について考えるとき、そして核兵器の使用などという過ちを二度と繰り返してはならないと訴えるとき、被爆体験をいかに伝承するかが課題となっています。

派遣生のみなさんは、これから大人になっても同じ世代の人たち、後輩、家族、出逢う人たちと今回の体験で感じたことを共有していってください。

最後になりますが、派遣生のみなさんを快く送り出してくださった保護者の方々、ご協力いただいた方々に感謝申し上げ、あいさつといたします。

広島平和記念式典派遣事業日程

 $18:30 \sim 19:30$

事前研修 7月14日(木)

◇ 学校教育課長あいさつ

◇ 参加者・引率者自己紹介

◇ 「広島平和記念式典」派遣事業について

• 事業概要説明(目的•活動内容等)

・当日までの準備

1日目 8月5日(金)

◇ 出発式(燕市役所)
7:00 ~ 7:20

◇ 移動(燕三条~広島)※ 被爆体験講話(広島市青少年センター)8:04 ~ 14:3115:30 ~ 16:30

◇ 平和記念公園 17:00 ~ 19:00

・ 千羽鶴奉納 (原爆の子の像)

• 広島平和記念資料館見学

◇ ホテルにてミーティング 21:00 ~ 21:10

2日目 8月6日(土)

◇ 広島平和記念式典参加 8:00 ~ 8:45

• 原爆死没者名簿奉納

・献花、黙とう

• 平和宣言(広島市長)

・ 平和への誓い (子ども代表)

• 来賓あいさつ

平和の歌(合唱)

◇ ヒロシマの心を世界に2016見学 9:10 ~ 11:00

◇ 広島平和記念公園 15:00 ~ 16:30

• ボランティアガイドによる公園内見学

◇ 広島原爆死没者追悼平和祈念館見学 17:00 ~ 18:00

• 被爆体験記朗読会参加

◇ 灯籠流し参加 18:00 ~ 19:00

◇ ホテルにてミーティング 21:20 ~ 21:45

3日月 8月7日(日)

◇ 呉市内散策 7:30 ~ 11:00

・ 呉市海事歴史科学館 (大和ミュージアム)

• 鉄のくじら館

◇ 移動(広島~燕三条) 12:52 ~ 19:06

◇ 解散(燕三条駅) 19:10

報告会 8月27日(土) 10:00 ~ 11:00

◇ 報告会

・教育長あいさつ

• 派遣概要報告

平和への誓い

・参加者より「学び」の報告

・市長から参加者へねぎらいの言葉

















研修レポート

- ①出発式参加者決意表明
- ②参加者レポート

燕中学校 小黒 有希

小池中学校 近藤 翼

燕北中学校 安井 陸渡

吉田中学校 鈴木 志歩

分水中学校 千嵐 さくら

- ③平和への誓い
- ④引率者レポート

学校教育課 指導主事 小泉 浩彰

学校教育課 指導係主任 諸橋 圭子

⑤平和記念式典派遣事業の様子

平成 28 年度「広島平和記念式典」派遣事業出発式 参加者決意表明

燕中学校:小黒 有希

私はこの広島派遣で普段学べないことをたくさん知りたいです。日常ではニュースや学校の教科書でしか学べません。だから色々学んで燕中学校の生徒に伝えて原爆についての興味・関心をもってもらえるようにがんばります。また、私自身も平和についてきちんと考えるようにしたいです。

小池中学校:近藤 翼

僕はこの広島派遣で、授業などでは学べないことをたくさん学んできたいです。今年は戦後71年で、実際に被爆された方も高齢になってきているので、 僕たちがしっかりと学校の代表という自覚をもって話を聴いて学び、感じてきたいです。

燕北中学校:安井 陸渡

戦争が終わって71年の年月が経とうとしています。戦争では、たくさんの 戦没者の方々がいます。そういった悲惨な歴史、二度と繰り返してはいけない 歴史を学ぶために、現地の方々との交流を大切にしていきたいです。また、学 んだことを持もち帰ってプレゼンをするときに、関心を持ってもらえるように、 この派遣を充実したものにしていきたいです。

吉田中学校:鈴木 志歩

広島に原爆が投下され、71年が過ぎようとしています。その悲劇から71年経った今、私たちは戦争を知らずに生きてきました。この広島派遣をとおして、原爆の恐ろしさや、10年後、20年後の平和について、目で、耳で、肌で感じながら学んできたいと思います。また、友達や先生方、地域の方々にしっかりと伝えられるよう一生懸命頑張ります。

分水中学校:千嵐 さくら

今回の広島派遣では、実際に原爆の脅威を体験された方からのお話を聞けるということで、教科書の文字からは知ることのできない原爆の姿を学んできたいと思います。「二度と繰り返してはならない悲劇」の実態をきちんと捉え、「平和」に向けて私たちができることは何なのかということを考えてきたいです。 燕市の、分水中学校の代表として学びの姿勢を絶やさずに、現地で学んだことをより多くの人の心に届けられるよう努力していきます。

①事前学習「広島原爆投下の背景」

<原爆投下の理由>

1943年5月、アメリカが原爆投下の対象に想定していたのはドイツではなく日本でした。翌年9月、アメリカとイギリスの首脳は日本への原爆使用を合意しました。1945年春からアメリカは投下目標都市の検討を始めました。投下目標は原爆の効果を正確に測定できるよう直径3マイル以上の市街地をもつ都市の中から選び空襲を禁止しました。7月25日には目標都市の広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに対する投下命令を下しました



<ヤルタ会談について>

1945年、米、英、ソ連の首脳によるヤルタ会談でソ連はドイツの降伏から3カ月以内に日本に参戦することを極秘に決めていました。米国はソ連の対日より前に原爆を日本に投下し、大戦後、世界でソ連より優位に立ちたいと考えていました。

②学びの記録「被爆証言講和」

<畑谷さんが体験したこと>

当時畑谷さんは小学2年生、爆心地からおよそ1.5 km離れたところに家がありました。8月6日、畑谷さんは友達と一緒に学校へ行くところでした。友達の家を出たとき空がピカッと光ったかと思ったら気絶していました。気が付くと地下まで友達と一緒に飛ばされていました。お母さんに助けてもらい、地上に出ると、ものすごい光景を目にしました。建物や植物が無くなり、道端に人が倒れている、地獄絵のようだったと言っていました。特に橋を渡っている時、川を見ると人の頭で埋め尽くされていたそうです。私はこのことを知ったとき、改めて原子爆弾の恐ろしさに気付きました。もう原子爆弾が使われないときがくるといいです。





<被爆した人について>

畑谷さんも被爆しています。昔は被爆した女性は嫁にもらえないという差別があったそうです。ですが、被爆した人の子供も病気になるとは限らないと言っていました。このことについて私はどれだけ昔の被爆した人が辛い思いをしたのかがわかりました。

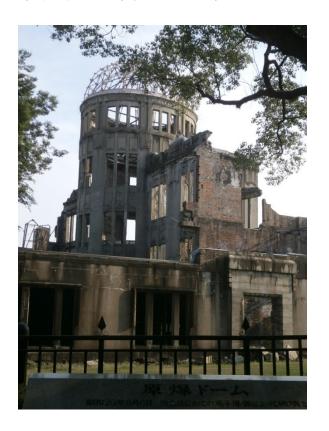
③ 学びの報告

私は広島派遣で何度も考える場面がありました。平和記念資料館を見たとき、 千羽鶴を奉納したとき、広島市青年センターで講話をしてもらったときなどで す。自分なりに「平和」について考えることができる良い機会だったと思いま した。

世界を平和にするためには身近なことからするべきだと私は思っています。 たとえば困っている人がいたら助けたり、友達の相談にのったり、まわりが喜 ぶことをしたり、などです。このようなことをすると相手の人も何かしてみよ うという気が起こるかもしれません。

私は世界が平和になってほしいと思っているし、誰だって平和の方がいいと思う人がたくさんいると思います。そして平和になるためには人と人との「支え合い」や「助け合い」が大切だと思います。

これからも身の回りが平和になるようにがんばりたいです。



①事前学習「戦後の復興と平和」

<戦後の復興>

1945年11月に復興についての新しい機構「戦災復興院」が発足しました。 戦災復興院では、直ちに「戦災復興計画基本方針」を策定し、閣議決定を行い、特別都市計画法が制定されました。これは、各都市で土地区画整理事業による復興計画に取り込まれました。

しかし、国の財政の厳しさで予定通りの予算が確保できず、どんどん計画が 縮小されて行きました。

こうして 1954 年に完了予定が 1957 年まで至り、さらに縮小され、今後も事業が必要な地区は別の事業として継続されることになりました。

この事業は大都市よりも中小都市の方が順調に進みましたが、広島市のような都市計画関係者と市民の良い連携で計画により近い形で実現されたところもあります。70年間は草木も生えないと言われた広島の地ですが、現在では美しい緑あふれる公園や川、また高いビルが立ち並び、原子爆弾投下直後の焼け野原を感じさせないほど復興しました。





<これからの平和>

今の日本は「核兵器を持たないから平和につながっている」という状態です。 他にも人々の、戦争や原爆に対する理解によって成り立っています。しかし世界ではどうでしょうか。中東の方では今でも戦争が続いています。他にも、核兵器を保有している国が多くあります。この状況下で改めて歴史を振り返り、世界に発信していくこと。これが原爆を体験した日本ができる大きなことなのです。これを続けていくことで世界の平和にもつながっていくと思いました。

②学びの記録「広島平和記念資料館」

広島平和記念資料館には、原子爆弾が落とされた当時のものや再現されたものが展示されていました。見るからに当時の恐ろしさを教えてくれる資料からは、改めて平和について考えさせられる。そんな場所でした。



<原子爆弾投下当時の再現人形>



この人形からは、いかに原子爆弾の 熱線が恐ろしいものだったかというこ とが伝わってきます。上空 600 メート ルで爆発し、半径 2 キロメートル以内 の建物をほとんど全壊させた原子爆弾 は、爆風だけでなく熱線も出していま した。その熱線は、人間が身に着けて いた衣服をボロボロにし、皮膚をドロ ドロに溶かしてしまうほどの威力があ

ったということがこの人形から分かります。他にも放射線による被害や後遺症 についても展示されていました。これらの展示を見て核廃絶への想いがより一 層大きくなりました。

<原子爆弾の模型>





左の写真は広島に落とされた原子爆弾(リトルボーイ)の模型です。この原子爆弾は「核分裂連鎖反応」を起こし、瞬間的に非常に強大なエネルギーを生み出し、広島を一瞬で焼け野原にしました。このような核兵器は今でも平和の敵になっているので一秒でも早く無くなってほしいと強く思いました。

③学びの報告

この3日間で原子爆弾の恐ろしさや平和の大切さをより深く学ぶことができました。

被爆体験講話では、原子爆弾が落ちた当時の信じられないような状況を詳しく話してくださいました。そのお話は、今の美しい街並みからは全く想像できないものばかりで、どれほど恐ろしかったのかを改めて伝えてくださる内容でした。

平和記念式典では、たくさんの外国人の方がいて日本だけでなく世界の国々 も平和を願っているのだと改めて感じることができました。

日本は原爆を体験した国としてこれからの世代にしっかりと語り継ぎ、世界に発信していくことがこれからの日本で大切なことだと強く思いました。



① 事前学習「太平洋戦争戦時下の生活」

太平洋戦争は1941年12月8日から、1945年9月2日まで続いた長い戦争です。その中で枢軸国軍側の日本は、連合国軍と対立してきました。劣勢だった日本は軍事力を増すために、国民に次のような生活を送らせました。

<食生活>

戦争中の食生活は非常に貧しいものでした。その理由としては、食糧生産の 現場で従事していた人が軍に召集されたり、戦場へ食糧が送られたりと、食糧

生産が間に合わない事態になったからです。そこで、配給制となり切符での交換となっていきました。しかし、それだけでは食べていけません。なぜなら、切符分だけではあまりにも少なすぎるからです。そのため、人々は雑草を野菜代わりとしたり、あらゆる場所を畑にしたりなど、出来ることはすべて行いました。また、それでも足りない人々は「闇」といった不正な取引で物資を確保していきました。



↑配給切符

<子どもたち>

今、私たちは何不自由なく学校へ行き、授業を受けていますが、当時は違いました。小学校は国民学校となり、知識を増やすことよりも、体力づくりや天皇を崇めたりしていました。子どもたちは軍国主義の教育を受けていたのです。

また、空襲から逃れるために学童疎開をした子どもたちもいました。お寺などに集団で寝泊りをするもので、勉強・家事などをして暮らしました。しかし、食事の量は少なくて着替えも無かったため、衛生状態が悪く、病気になりやすかったのです。

戦争も激しくなると、国民学校の授業も停止され、勤労動員として働きました。 農作業やドングリ集め、油の採取などに一日を費やしていました。



②学びの記録「ヒロシマの心を世界に」

<「ヒロシマの心を世界に2016」について>

広島国際会議場で行われるイベントで、世界恒久平和を願う広島の心を子どもたちが、劇やスピーチなどの様々な形で伝えていきます。広島県のみならず、全国の子どもたちがそれぞれの持つ平和への思いを訴えていて、どれも心に響くものばかりでした。



<演劇「8月の青い蝶」>

第 26 回小説すばる新人賞、第 5 回広島本大賞受賞作品を舞台化。当時と現在を交錯しながら展開する物語を、広島市立舟入高等学校演劇部の人達が演じました。

物語…家族が見つけた小さな青い蝶の標本。そこには幼かった父の壮絶且つ切ない過去があったのです。ある日を境に愛する人と会えなくなった父の辛さが伝わる感動作です。



<ひろしま子ども平和の集い>

平和記念式典の参列に来た子どもたちと広島の子供たちが、スピーチや音楽、 演劇などの様々な方法で平和への熱い思いを発信していました。



③ 学びの報告

今回の広島派遣では、自分なりに成長することができたと思います。被爆者の方の体験談を聴けたり、平和記念式典に出席したりなど、この先機会がなかなか無い貴重な体験をすることができました。

被爆者の方の体験談では、普段絶対に聴くことのできない悲惨な過去を伝えてくださいました。友達を置いて逃げるのは本当につらかったと思います。また、資料館では実際に目で見たり、肌で触れたりして悲惨な状況を実感しました。胸が痛くなるほどでしたが、しっかりと心に留めました。

これらを経験したうえで、改めて「平和」について考えてみると、答えが明確に出てくるような気がします。今回の 3 日間では現地の方々に、そして仲間に支えられました。平和とはこのような支え合いが地球規模であるということなのだと強く思います。

僕は一校の代表ではありますが、平和記念式典に出席したうちのただの一人です。ですが、やれることはたくさんあります。自分の学校の生徒や、地域の方へ、学んだことを興味を持って聞いてもらい、平和について考えてもらいたいと思います。そして、少しでも平和へのきっかけになれたら嬉しいです。

~小さな一歩で変わる未来~



①事前学習「原爆の被害・惨状」

<広島の原爆による被害者>

被爆当時、広島には約35万人がいました。また、留学生、捕虜などの外国人も含まれていました。原爆によって死亡した人の数については、現在も正確にはつかめていません。しかし、放射線による急性障害がおさまった、1945年12月末までに、推定約14万人が死亡しました。爆心地から1.2kmでは、その日のうちにほぼ50%が、それよりも爆心地に近い地域では推定80~100%が死亡しました。

<広島に投下された原子爆弾と犠牲者>

広島に投下された原子爆弾は、核分裂がごく短い時間に連続して起こるとき に発生する膨大なエネルギーを利用した、それまでとは全く違った原理による 兵器です。その被害を受けた犠牲者の主な死因は、4 つあります。

- 1. **爆風** 爆発点は数十万気圧という超高圧となり、まわりの空気が急激に 膨張しました。最大風速は秒速 440m に達し、エネルギー比で、台 風の暴風エネルギーの 1,000 倍にもなりました。人々は吹き飛ばさ れ、即死、負傷、建物の下敷きになって圧死した人が相次ぎました。
- 2. **熱線** 爆発の瞬間、発生した火球の温度は 100 万度を超え、1 秒後には 直径 280m を超える大きさとなり、そこから出た非常に強い熱線に よって、表面温度は 3,000~4,000℃にも達しました。多くの人が、 血みどろになったボロボロの衣服を身にまとい、瓦礫の街を逃げ惑 いました。
- 3. 高熱火災 強い熱線により、市内のいたるところから火の手があがり、燃えるものは燃えつくし、火災がおおむね収まったのは、投下から3日後のことでした。倒壊した建物の下敷きになり、逃げることもできず、生きながら焼かれて亡くなった人も数知れません。
- 4. 放射線 爆発後1分以内に放射された初期放射線によって爆心地から1km 以内にいた人は致命的な影響を受け、その多くは数日のうちに死亡しました。さらに、爆発後、長時間残留放射線が残り、直接被爆していなくても肉親を探したり、救護活動のために爆心地近くに行ったりした人は発病し、死亡する人もいました。



このように巨大な破壊力をもった原爆は、たった1発で広島を廃虚の街にしてしまいました。

②学びの記録「平和記念公園」

1954年4月1日、広島平和記念公園完成。平和公園及びその周辺の緑地帯には、50を越える原爆関係の記念碑・記念建造物があります。

<原爆死没者慰霊碑>

碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませぬから」という碑文が刻まれており、中央の石室には、国内外を問わず、亡くなった原爆被爆者の名前を記帳した原爆死没者名簿が納められています。

名簿は関係者の申し出により書き加えられ、平成28年(2016年)8月6日現在で、111冊(303,195人の名前が記帳された110冊と「氏名不詳者多数」と記された1冊)になっています。



<原爆ドーム>

大正 4 年(1915 年)に広島県内の物産品の展示・販売をする施設として建てられ、当時は「広島県産業奨励館」と呼ばれていました。人類史上最初の原子爆弾による被爆の惨禍を伝える歴史の証人として、また、核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボルとして 1996 年(平成 8 年)12 月に世界遺産に登録されました。



<平和の灯・池>

台座は、手首を合わせ、手のひらを大空にひろげた表現をしており、水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と恒久平和への願いを込めています。この火は昭和39年(1964年)8月1日に点火されて以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核悲願の象徴となっています。



③学びの報告

「なんて大きな街だろう。」

私はそう思いながら広島の街を見渡しました。71年前に、ここがあたり一面何も無くなってしまったなんて、言われなければ分からないほど、広島は復興していました。しかし、きれいな街に1つ、原爆ドームだけは当時のことを、当時の人々の苦しみを訴えかけてきます。

被爆体験講話をしてくださった、7歳で被爆した畑谷さんは、「原爆は、人も、建物も一瞬にしてなくしてしまう。」「川には頭しか見えないほど死体で埋め尽くされていた。」などと、当時のことをとても詳しくお話してくださいました。 資料を読むのとは全然違って、身をもって体験した方から話を聴くと、とても胸に刺さるものがありました。

しかし、それだけの辛い思いをしても、畑谷さんは「昔から笑顔が取り柄で、よくお友達から笑顔がいいねと言われて嬉しかった。これからもずっと笑顔でいたい。」と言っていました。これを聴いて、私たちが今、笑顔で過ごせるのはとても素晴らしいことなのだと思うとともに、この悲劇を私たちが伝えていかなければいけないと強く感じました。

まだ、世界中には約15,850 発の核兵器があると言われています。たった一発であれだけの威力あると考えると、とても恐ろしい数です。核兵器の廃絶は、それぞれの国にだけ求められているものではありません。核兵器をなくすには一人一人が平和を願い、核兵器のない社会を実現しようとする強い意志が必要だと思います。

「「あっ」という間に街が消える。」

そんなこと想像できますか。いや、想像をしないと、目を向けないといけないのです。若い世代は戦争を知りません。だからこそ、私たち1人1人が伝えていかなければいけません。まずは、平和を願い、行動をしましょう。些細なことから。



①事前学習「現職米大統領広島訪問」

<現職米大統領 オバマ氏の所感>

オバマ大統領の所感には次のようなポイントがありました。

1つ目に「広島へ来た理由」です。オバマ氏はこの理由について「それほど遠くない過去に解き放たれた恐ろしい力について考えるため」と話しました。 また「多くの犠牲者を追悼するため」とも話しました。

2つ目は「広島の記憶を風化させず、二度と繰り返さないために何をすればいいかを問う責任がある」ということです。「我々は歴史を直視しなければならない」というオバマ氏の想いに私も共感しました。

そして、3つ目に「核兵器なき世界の追求」についてです。これについてオ



バマ氏は「核保有国は恐怖の論理から逃れなければならない」、「人類という一つの家族の仲間という考えを伝えなければ」と訴えました。

オバマ氏はこのような所感表明を 約17分間行い、最後に「広島と長崎 は核戦争の夜明けとしてではなく、 道徳的な目覚めの始まりとして知ら れるだろう」と締めくくりました。

<被爆者の方の2つの声>

オバマ氏の所感を聞き、被爆者の方からは2つの意見が出ていました。

被爆当時小学4年生だった本間文紀子さん(81)は「原爆は恨むけど、米国に恨みはない。ただ戦争は二度とあってはならない」と力を込め、「一日も早く核廃絶が進んでほしい」と語りました。加納実紀代さん(75)は「核なき世界を訴えたプラハ演説に比べると、一般論に終始し内容が後退した印象だ」と話しました。

また、原爆投下について謝罪がなかったことに対する不満の声も聞かれた一方で、被爆者の方を抱きしめるなど積極的な行動も見られ、核兵器根絶への第一歩となったようにも見られました。

② 学びの記録「広島平和記念式典」

8月6日、青く美しい広島の空の下で今年も広島平和記念式典が行われました。当日の式典には国内外問わず多くの方が参列していらっしゃいました。71年――。この数字の表す重さを、今一度私たちは考えなければなりません。 広島市議会議長の永田雅紀氏や広島市長の松井一實氏は現職米国大統領の広島訪問について触れ、「核兵器のない世界に向けて英断すること、リーダーシップをとること」などを望むと述べられました。

今年、被爆者で亡くなられた方は30万人を超えたということです。現在被爆者の方の平均年齢は80歳を超え、被爆者が自らの口で原爆の悲劇を語る機会も減りつつあります。

そんな中、この式典では子ども代表として2人の小学生による平和への誓いが行われました。「もっと知りたいのです。もっと伝えたいのです。」という力強い言葉に心打たれました。「私たちは、待っているだけではいけないのです。誰が、平和な世界にするのでしょうか。夢や希望にあふれた未来は、ぼくたち、わたしたち、一人一人が創るのです。」それを聞いて、これからの世界にこの悲劇を伝えていくのは他でもない我々なのだと自覚させられました。

式の最後には参加者全員で「ひろしま平和の歌」を合唱しました。

「鐘は鳴る平和の鐘に」この詩のとおり、平和の鐘が鳴るかぎり人々が平和を願い続けることができる、そう思いました。

参加者に配られたプログラムには、一枚ずつ小さな折り紙が挟み込まれていました。参加者はその折り紙で小さな鶴を折ります。そして参加者全員の鶴がひとつになった時、大きな、平和を願う鶴が完成するのです。国籍も人種も様々な参加者一人ひとりの「平和」への想いが形になる瞬間です。

「絶対悪」である原爆は一瞬で全てを奪い去りました。町も生活も命も、全て……。そしてその惨劇に、71年たった今、国境を越え多くの人が向き合おうとしています。この広島平和記念式典が今後もそのような場であり続けることを願います。



③ 学びの報告

この3日間は私の中の大切なものを大きく成長させてくれました。講話を聴き、資料館を見学し、広島平和記念式典に参加し、平和記念公園内を見学し、そして平和の願いを込めた千羽鶴を奉納する――。それら一つ一つの行動に意味があり、重みがありました。「命の重さ」でした。

被爆講話では、小学2年生の時被爆された畑谷さんのお話をお聴きしました。 文字からは伝わらない痛みや苦しみが、実際に体験した方の言葉として私に伝 わりました。畑谷さんは最後に「今こうして笑えること、誰かの幸せを嬉しい と思えること、それが今一番嬉しい」と仰いました。





原爆ドームは、ただ、静かにそこにありました。その静かな主張が、私の心に刺さりました。むき出しの鉄骨もはがれたレンガも焦げた壁も……全てが原爆の恐ろしさを物語っていました。

「平和って、何なんだろう」

この派遣の前からずっと考えていました。誰かの説明を聞いても納得しきれない私がいました。でも、広島から帰ってきて、分かった気がします。

家族が居ることです。友達が居ることです。それらが突然居なくならないことです。幸せを感じながら命の幕を閉じられることです。

世界は今、平和ですか。——この問いに自信を持って誰もが「はい」と言える世界が訪れることを、心の底から願っています。



身の回りの平和を大切にします

燕中学校3年 小黒 有希はぐろゆき

これからの自分たちの するべき行動を考えていきます

小池中学校3年 近藤 翼(こんどう つばさ)

伝えていきます 平和に関心をもってもらうために

燕北中学校3年 安井 陸渡(やすいりくと)

些細(ささい)なことから 平和を願い行動します

吉田中学校3年 鈴木 志歩(すずき しほ)

家族 友だちという 平和の証を守っていきます

分水中学校3年 千嵐さくら(ちあらしさくら)



「なぜ私たちはこの地、広島に来るのか」 ~ 語り伝えよう 広島のことを ~

(引率者) 学校教育課 指導主事 小泉 浩彰

[Why do we come to this place, to Hiroshima?]

平成28年5月に広島を訪れた現職米国大統領バラク・オバマ氏の言葉です。 8月5日~7日の3日間、燕市「広島平和記念式典」派遣事業として、市内中学3年生5人と、国際的な視点をもって命の尊厳や平和の尊さについて理解できる生徒の育成を目的として、広島の地へ行ってまいりました。

- 3日間の主な内容は以下のとおりでした。
- ・被爆体験者である語り部の方から講話を聴講
- ・原爆の子の像に各学校からの千羽鶴を奉納
- ・広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加
- ・広島平和記念資料館、原爆ドーム等の見学
- ・平和記念公園における灯篭流しに参加 等



語り部の畑谷由江さんをはじめ、いろいろな方々と出会いお話を伺うことができました。数々の資料が戦後71年間の広島の様子を語りかけてきました。最も印象に残ったのは平和祈念式での2人の小学生による『平和への誓い』でした。

「人が焼けるにおいがした」 「ある者は、肌が溶けて人間には見えんかった」 原子爆弾が落とされた広島の様子を、語り部の方は語ってくれました。思い出したくない、胸が張り裂けそうだ。 被爆された人の辛さは、いつまでも、いつまでも終わることはありません。

被爆者の思いや被爆の事実を自らの体験のように、想像するのです。

聞きたくても、聞くことができなくなる日が近づいています。

一瞬で街がつぶれ、日常や夢を踏みにじられた昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分の出来事を、私たちはもっと、知りたいのです。もっと、伝えたいのです。

~略~

私たちは、待っているだけではいけないのです。 誰が、平和な世界にするのでしょうか。

夢や希望にあふれた未来は、ぼくたち、わたしたち、 一人一人が創るのです。

私たちには、被爆者から託された声を伝える責任が あるのです。

一人一人が、自分の言葉で、丁寧に、戦争を知らない人へ 次の世代へ 世界の人々へ 命の尊さを 平和への願いを 私たちが語り伝えていきます。



バラク・オバマ氏は『所感』で次のように述べています。

Among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we must have the courage to escape the logic of fear and pursue a world without them. 私の国のように核を保有する国々は、 恐怖の論理から逃れ、核兵器なき世界 を追求する勇気を持たなければなりま せん。

~ 略 ~

The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious, the radical and necessary notion that we are part of a single human family: That is the story that we all must tell.

That is why we come to Hiroshima, so that we might think of people we love, the first smile from our children in the morning, the gentle touch from a spouse over the kitchen table, the comforting embrace of a parent.

全ての人のかけがいのない価値、全ての 命が貴重であるという主張、我々は人類 という一つの家族の仲間であるという 根源的で必要な考え。我々はこれら全て を伝えなければならない。

だからこそ私たちは、広島に来たのです。 私たちが愛する人々のことを考えられる ように。子どもの朝一番の笑顔のことを 考えられるように。台所のテーブル越し に妻や夫と優しく触れ合うことを考えられるように。父や母が心地よく抱き締め てくれることを考えられるように。

鈴木市長は出発式での激励の言葉で、「歴史を 学ぶことはもちろんですが、次の未来のために 自分たちが何をしなければならないのかをしっ かり考える機会にしてほしい。そして、それを 自分たちの仲間に発表し伝えてほしい。」 と話しました。





5人の派遣生は8月27日の報告会で、「それぞれの思いを、それぞれの場面で伝えます。」と、自分たちで考えた平和への誓いを力強く語りかけてくれました。その後各校において広島のことを伝えてくれました。

なぜ私たちはあの地、広島に行ったのか。 8月6日の朝の記憶を風化させないため。 核兵器なき世界を追求するため。

子どもたちの朝一番の笑顔を守るため。

【参考文献】平成28年5月28日(土)新潟日報朝刊

一人一人の力

(引率者) 学校教育課 諸橋 圭子

私にとっては、昨年度に引き続き、2回目の引率となりました。

昨年とほぼ同様の行程をたどることとなりましたが、感じ方は違いました。 それは今年、アメリカ現職大統領が、原爆投下後の広島を初めて訪れたこと や、世界情勢の悪化によりテロへの警戒が昨年より厳しくなっていたという理 由もあったと思います。



それとは別に、これだけの大きな式典や一連の行事の運営を誰がどうしているのかという見方もあったからです。

もちろん、広島市という行政の大きな主導はあるにせよ、市だけでは到底で きるとは思えません。そこには平和を願う市民、それぞれができることを行お うとする行動がありました。

広島市内女子高生が平和公園内の記念碑めぐりを案内するボランティア。暑い広島での休憩場所で、抹茶を振る舞う大学生のボランティア。灯ろう流しやピースキャンドルの運営を行う NPO 団体。

また、年間を通して平和記念資料館内や平和記念公園を案内しているピースボランティアの方々。

資料館でピースボランティアを行っている方へ「なぜボランティアを行っているのか」とたずねたところ、「生まれは広島ではないが、縁あって広島市民となった。何かしたいと思ってこのボランティアを始めた。英語が話せるので、外国の方の案内もしている。」と、自分ができることを行動する姿がありました。





原爆の子の像は、被爆し白血病で亡くなった佐々木禎子さんの小学生の同級 生たちが、何か自分たちで禎子さんのためにできることはないか、そして被爆 したために病気で苦しんでいる子どもたちにできることはないかと考え、原爆 の子の像を建てることを決め、募金活動を行い建てたそうです。(禎子さんの同 級生は募金活動を行っていた時、小学生だったそうです。)

広島の地には、市民一人一人の小さな力による平和へ導くためのストーリーがたくさんあります。

市民1人の力は微力ではあるが、無力ではないということを肌で感じることができる地です。

広島の地を訪れた5人の派遣生たちも、このことを体や心で感じることができたと思います。

「過去を学び、現在を知り、未来をつくる。」鈴木市長が8月5日の広島へ旅立つ前に、派遣生へ送った言葉です。これからの未来をつくるためのヒントが広島には、たくさんあったと思います。

派遣生のみなさん、平和大使としての活躍をこれからも期待しています。それと同時にいつも応援しています。



平和記念式典派遣事業の様子



出発式にて



広島平和記念資料館にて



千羽鶴奉納



平和記念式典会場



平和記念式典会場にて



原爆ドームにて



灯ろうに願いを込めて



灯ろう流し



報告会の様子





中学校での発表の様子

1. 派遣事業の概要

派遣事業の概要は次のとおり。目的を理解し、有意義な学習活動となるよう留意する。

(1)目的

非核平和宣言都市推進事業及び平和学習活動実施の一環として、広島平和記念式典をは じめとするさまざまな催しに次代を担う中学生を派遣することにより、国際的な視点をも って命の尊厳や平和の尊さについて理解できる生徒を育成することを目的とする。

(2) 主な活動内容

- ①広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式への参列
- ②広島平和記念資料館、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑等の見学
- ③原爆の子の像に各校で作成した千羽鶴の奉納
- ④被爆体験講話の受講
- ⑤灯ろう流しへの参加
- ⑥全校生徒への報告 (2学期に、各学校で報告会などを実施)
- ⑦報告書の提出

2. 派遣事業参加中の役割分担

自主的な学習活動を進めるため、役割分担をする。

	役割分担の内容	人数	氏名 (中学)
(1)	ミーティング司会	1名	近藤 翼 (小池中)
(2)	記録(見学・訪問先等)	2名	千嵐 さくら (分中)
			小黒 有希 (燕中)
(3)	お礼のことば	1名	安井 陸渡 (燕北中)
(4.)	引率者との連絡調整	1名	鈴木 志歩 (吉田中)

3. 学習の過程及び分担

より有意義な体験にし、各学校の全校生徒へより効果的に伝えるため、「事前の学習」、 「学びの記録」、「学びの報告」という3ステップで学習活動を進める。

(1) 事前の学習 事前に以下のことについて学習し、より充実した体験とする。

①日程及び資料の確認 (担当: 全員)

②被爆体験者への質問 (担当: 全員)

③太平洋戦争戦時下の生活 (担当: 安井 陸渡)

(担当: 小黒 有希) ④広島原爆投下の背景

⑤原爆の被害・惨状 (担当: 鈴木 志歩)

⑥戦後の復興と平和 (担当: 近藤 翼)

⑦長崎原爆投下について (担当: 千嵐 さくら)

27

(2) 学びの記録(参加中の体験、学習)

以下の項目について担当がそれぞれレポートとしてまとめる。

① 平和記念公園
 ② 平和記念公園
 ② 中和記念資料館
 ③ ヒロシマの心を世界に 2016等
 ④ 被爆体験講話
 ⑤ 広島平和記念式典
 (担当: 分末 有希)
 (担当: 千嵐 さくら)

(広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)

(3) 学びの報告(まとめ)

参加前の学習や実際に3日間の研修に参加して得たものや感じたこと、またこれらの経験を受けて、全校生徒や周りの人に伝えたいことをまとめる。

4. 広島平和記念式典派遣事業報告会

日 時:8月27日(土)午前10時から11時 場 所:燕市役所1階 会議室101~103

被爆アオギリ二世

被爆アオギリ二世の親木のアオギリは、爆心地から北東1.3 kmにある中国郵政局の中庭で被爆しました。爆心地側の幹半分が熱線と爆風により焼けてえぐられましたが、焦土の中で青々と芽を吹き返し、被爆者に生きる希望を与えました。その後、このアオギリは昭和48年(1973年)に平和記念公園内に移植され、今でも樹皮が傷跡を包むようにして成長を続けています。被爆アオギリ2世は、このアオギリの種から育てられたもので、「平和を愛する心」、「命あるものを大切にする心」を育み、平和の尊さを伝えるとともに、過ちを再び繰り返さないよう、被爆の実相を後世に伝えます。

燕 市 平成19年4月 植樹



燕市役所正面出入口前





広島平和記念式典派遣事業実施報告書

平成28年8月5日(金)~7日(日)

燕市教育委員会学校教育課